



## ～コンサルタント訪問～

8月19日～20日にかけて、本校のIBコンサルタント（指導教諭）である広島叡智学園中等教育学校、主幹教諭・古市吉洋先生が来校され、本校のIB教育の進捗状況についてご確認いただきました。全教職員・代表生徒・保護者との面談、授業観察を行っていただき、たくさんのアドバイスをもらいました。

古市先生からご指摘いただいた中で、教職員・生徒だけではなく保護者の方へもご理解いただきたい部分がありますので[ここからじっくりとお読みください](#)。

### ① 「CP（コミュニティープロジェクト）が中心的な役割となっていない」

教職員、生徒、保護者ともにコミュニティープロジェクトが3年間の集大成になるという意識が弱い。まずは教員が、各教科の学習で今学んでいることはどのようにCPにつながっていくのかということを考えながら授業を行っていく必要があります、生徒はそれを理解できるようにしていかなければならない。

⇒確かにこれまでの取り組みは、授業は授業、CPはCPと切り離されたカリキュラムになっていたため、教職員がCPのことを意識した授業とはなっていませんでした。まずは、教員研修を進めるとともに、授業の中で、今日学んだことはCPのどんな場面で活かせるかということをも自然と考えられるよう、教員も生徒もお互いに高め合っていけたらと思います。

### ② 「IBが運用されてはいるが浸透はしていない」

ユニットプランナーを用いて授業は行っているが、単元中・単元終了後の振り返りをもとに、次年度に向けてのアップデートがされていない。常に更新が必要。

教員も生徒もATLチャートを意識した授業となるように研修をしっかりと行うこと。

保護者は評価の部分でもややもやしていると感じたので、保護者対象に授業を行ってみたり、学習会を開いてみたり、保護者に対するアクションを行っていくこと。

⇒私も1番気がかりにしているところをアドバイスいただけて良かったと思っています。私も先生たちもIBを運用することに必死になりすぎていたことを反省しなければなりません。IBは「楽しんでなんぼ」だと思いますし、**教員がIBの良さを理解し生徒へそれを伝えながら授業を行っていかなければ**、間違いなく認定を受けたとしても尻すぼみしてしまいます。単元をゆっくと振り返ったり、概念やATLとしっかり向き合ったりする時間を確保しなければ、持続可能な取り組みにはならないと思いました。

保護者への評価に対する不安についても、4月にルーブリックを用いたワークショップを開催させていただきましたが、そう簡単に払拭できるものとは考えておりません。これまで〇か×でつけていた評価から、**どの規準に達したかを判断する評価になった**ので、当然わかりにくさを感じられていることと思います。この部分に関しては、教員と保護者による学習会の設置が必要だと考えています。とはいえ、一度に皆さんにお集まりいただくことは難しいと思いますので、何日間か設定して、保護者のみなさま全員に1度は参加していただけるよう取り組んで参りたいと思います。

2日間、私の方で帯広市内のホテルから本校まで古市先生を送迎させていただきました。車内では、普段のオンライン面談では聞くことのできない話をたくさん聞かせていただき、私にとって本当に貴重な時間でした。

～古市先生は30歳でオーストラリア・ハワイの研修に参加され、数学の教員ながら英検準1級をお持ちだそうです～



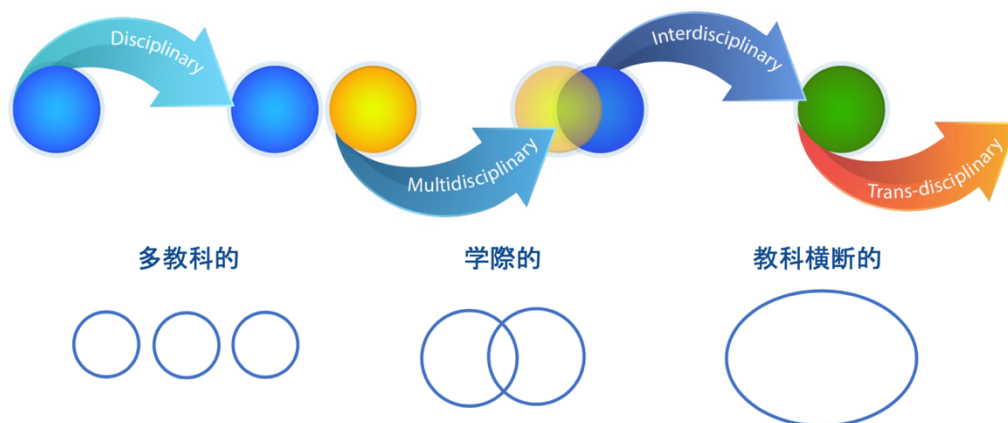
## ～仙台・埼玉ワークショップ～

8月1日～8月5日において、渡邊校長・岩城・中村・穰山がそれぞれのIBワークショップに参加してきました。4月に行われたオンラインでのワークショップにはない、対面式での講義により、IBについて深められた点や、今後の交流につながった有意義な3日間となりました。

私自身、数学のワークショップに参加させていただきましたが、講師の先生は市立札幌旭丘高等学校の大西先生でした。現在はIB校にお勤めではありませんが前任校が札幌開成中等教育学校で、コーディネーターをされていました。また、文部科学省IB教育推進コンソーシアムのACファシリテーターおよびIB教育導入サポーターを務められていたというIBを最も理解している中のお1人です。ワークショップもとてもわかりやすく、これまでの自分の理解との相違点が明確になったことが収穫でした。16人が4つのグループにわかれて討議を行う形式で、私のグループは「さいたま市立大宮国際中等教育学校」「埼玉県 私立開智所沢中等教育学校」「熊本県 私立文徳学園文徳中学校」の先生と同じグループでした。

前年度私はオンラインでIBコーディネーターのワークショップに参加しましたが、対面形式は初めてでした。1番の違いは休憩時間の中身です。3日間を通して正味5時間以上の休憩時間がある中で、基本ずっとお話をしていました。たくさんお話をさせていただいたことで、IBへの理解だけでなく、教育への多様な価値観に触れることができました。

IBでは教科と教科のつながり、教科と実生活とのつながりを大切にしており、瓜幕中学校でも2教科を組み合わせた単元（学際的単元）を行います。実は私はこれまで学際的＝教科横断的と誤った解釈をしていました。本当は以下の図のようなイメージでした。



つまり教科間の一部をつなげて（統合して）行うという学際的な学びに対し、教科という枠組みから抜け出して行うという教科横断的な学びになります。教科横断的な学びの必要性はこれまでよく言われていましたが、その1ステップ前に学際的な学びを取り入れることで、より良い教科横断的な学びになると考えられます。